

他動詞文の無生物3格と中域語順(2)¹

時田 伊津子

(東京外国語大学非常勤講師)

1. 問題提起

ドイツ語のDativ(3格, 与格)は目的語として4格と共に他動詞文に現れる際, 例文(1)のように, 主に人間を表すと言われている。² このように3格が生物を表す文において, 中域の語順は3格が先行し, 4格がそれに続く「3格-4格」語順が無標である, もしくは基本的であると言われている。³ 例文(1)では3格Mutter「母」が先行し, 4格Blumen「花」がそれに続いているが, この語順は無標語順, もしくは基本語順に一致しているということになる。

(1) Er schenkte der Mutter Blumen. 彼は母に花を贈った。

それに対し, 3格が無生物を表す文の中には, 「4格-3格」語順が無標だと見なされるものもある。例えば, 例文(2)のように, 4格Kind「子供」が3格Gefahr「危険」より先に現れている事例が該当する。

(2) Er setzte das Kind der Gefahr aus. 彼は子供を危険にさらした。

時田(2005)では, 無生物3格もしくは生物3格が現れる他動詞文をコーパスから収集し, 文意味タイプ毎に統語的特徴を分析した。⁴ 無生物3格の他動詞文では, ある程度の事例数が集まった付加, 影響の文意味タイプを分析対象とし, 比較対照のための生物3格の事例では, 授与の意味タイプと状態変化の文意味タイプを扱った。中域に現れる3格と4格の語順調査では, 生物3格の事例は「3格-4格」語順が現れる傾向が強いことが明らかになった。例文(3)のような授与タイプでは90%(176文)が, 例文(4)のような状態変化タイプでは94%(45文)がこの語順を示している。

(3) Er schenkte der Mutter Blumen. 彼は母に花を贈った。

(4) Er wusch dem Kind die Hände. 彼は子供の手を洗ってあげた。

¹ 「他動詞文の無生物3格と中域語順(1)」(=時田2005)は敦賀, 高垣, 浦田(2005)に掲載されている。

² 以下, 「他動詞文」はAkkusativobjekt(4格目的語, 対格目的語)を伴う文を指す。

³ 中域というのは, 主文では定動詞と, 文末の分詞や分離動詞前綴りに囲まれた部分, 副文においては, 従属接続詞と文末の動詞に囲まれた部分を指す。

⁴ 無生物3格の事例には付加, 影響, 方向, 適応, 比較の5つの文意味タイプが想定できる。「付加」のタイプは, 「(何か)に(あるもの)を付ける」もしくは「(何か)から取り外す」というように付加・付着や取り外しを表す。「影響」の文意味タイプは, 「(あるもの)を(何か)にさらす, 任せる」もしくは「(何か)から逃れさせる」というような出来事を記述し, 影響の関係の成立・解消を表す。「方向」のタイプは「(あるもの)を(何か)に近づける, 向ける」という文意味を表す。「適応」のタイプは「(あるもの)を(何か)に合わせる, 適応させる」という文意味を表現する。「比較」のタイプは「(あるもの)を(何か)と比較・対比する, (何か)に優先する」といった関係を表す。

一方、無生物3格の事例では、例文(5)のような「影響」の関係を表す事例では中域語順が「4格-3格」となる事例の頻度が高く(88%, 330文)、例文(6)のように「付加」のタイプの事例では「3格-4格」の語順が多く(93%, 316文)見られた。

(5) Er setzte das Kind der Gefahr aus. 彼は子供を危険にさらした。

(6) Er hat dem Strauß eine Karte beigelegt. 彼は花束にカードを付けた。

このことは、カイ2乗検定によっても0.00%の有意度で確認できた。⁵ 表1に文意味タイプ別の事例数を挙げる。

表1 中域語順

	生物3格の事例		無生物3格の事例	
	授与	状態変化	付加	影響
3格-4格	176 (90%)	45 (94%)	316 (93%)	45 (12%)
4格-3格	20 (10%)	3 (6%)	24 (7%)	330 (88%)
計	196	48	340	375

無標語順および基本語順は抽象的な概念であり、言語使用に見られる語順頻度と一致すると、必ずしも言えるわけではない。しかし上で述べたように、生物3格の事例においては無標語順も、分析結果に見られる優勢な語順も「3格-4格」である。また、無生物3格の事例のうち「影響」の文意味タイプは、先行研究で「4格-3格」が無標であるといわれる文と特徴が類似し、コーパス調査の結果においても「4格-3格」語順の事例が多い傾向が見られた。当該の他動詞文では無標もしくは基本的といわれる語順が、実際の言語使用においても高い頻度で用いられており、二者の間に相関性があると考えられる。すると、先行研究で余り言及はないが、「3格-4格」の語順が頻出している「付加」の文意味タイプでは、「3格-4格」が基本語順、もしくは無標語順である可能性が想定できる。相関性をまとめると表2のようになる。

表2 意味タイプ別 中域語順

	生物3格の事例		無生物3格の事例	
	状態変化	授与	付加	影響
先行研究による基本・無標語順	3格-4格		?	4格-3格
コーパス事例の傾向	3格-4格	3格-4格	3格-4格	4格-3格

そこで本稿では、無生物3格の事例について、基本語順と使用頻度上の語順の関係を明らかにする。具体的には、「影響」の事例と「4格-3格」語順、「付加」の事例と「3格-4格」語順との関連を探る。そのために、まず先行研究で提示されてい

⁵ カイ2乗検定では、ある仮説に基づいて2つの事象を調査し、その事象の表れに統計的な有意性があるかを判定することができる。ここで示したパーセントは、「付加の事例と影響の事例が異なる語順タイプである」という仮定が間違っている確率を表す。詳細は齋藤他(1998:77ff.)などに記載がある。

る語順決定要因や無標語順の定義を確認する。これをふまえ、基本語順や無標語順の手がかりとなる形態的、統語的、意味的現象を、頻度の観点から文意味タイプ別に調査する。なお、分析対象とする事例は時田(2005)でMKから収集したものとする。⁶

2. 先行研究

考察に入る前に、語順に関する先行研究を概観する。文の中域における3格と4格の語順については、いくつかの先行研究で言及されている。ここでは、先行研究を二つの方向性に従って挙げていく。まず一方は、語順規則や基本語順を求める研究である。このような研究では、実際のドイツ語文やコーパスの事例と照らし合わせながら、基本的な語順を抽出する。例えば、Engel (1972), Hoberg (1981), Zifonun et al. (1997)などがこれに該当する。もう一方には、無標語順を定義する研究がある。例えば、Lenerz (1977)は無標語順の定義を提示し、いくつかの条件のもとで見られる文の振る舞いから無標語順を求めようとしている。

以下では、2.1.で語順規則や基本語順について言及のある研究、続いて2.2.で、無標語順について述べている研究を概観し、文の中域における3格と4格の語順についてどのような記述がなされているかを挙げる。

2.1. 3格と4格の基本語順

2.1.1 Engel (1972), Hoberg (1981)

Engel (1972: 49ff.)は、「中域に現れる補足成分(Ergänzungen)、自由3格は(7)の公式に従って並べよ」という規則を挙げ、この規則は中域における補足成分の標準的語順(Normalfolge)を定めるとしている。(7)の記号は、N: 1格, A: 4格, D: 3格, P: 前置詞格, 1: 代名詞, 2: 定の名詞, 3: 不定の名詞を示す。)

(7) N1 A1 D1 N2 N3 D2 A2 D3 A3 P

この公式から、3格と4格の部分抜き出し、分かりやすく書き直すと(8)のようになる。

(8) 4格代名詞－3格代名詞－3格定名詞－4格定名詞－3格不定名詞－4格不定名詞

Engel (1972)による語順規則を言い換えると次のようになる。第一に、「代名詞－一定の名詞－不定の名詞」というレベルがある。例えば、代名詞 *ihn*「それ」と定名詞 *Bruder*「兄(弟)」では、例文(9)a.のように「代名詞－一定の名詞」の語順になり、

⁶ 事例収集は以下のように行った。"Langenscheidts Großwörterbuch Deutsch als Fremdsprache" 1999に記載されている他動詞のうち、ヴァレンツ表記に無生物3格が指定されている動詞を抜き出し、Institut für Deutsche Sprache, Mannheim で公開されているArchiv der geschriebenen Spracheのうち、Mannheimer Korpus 1, 2で事例を検索した。無生物3格を伴う文を抜き出したところ、59動詞の1206例が該当した。詳細は、時田(2005)に記述がある。

定の(固有)名詞 Egon「エーゴン」と不定の名詞 Häuser「家々」では例文bのように「定の名詞—不定の名詞」になると例を挙げている。

- (9) a. Gestern habe ich ihn meinem Bruder zurückgebracht. 昨日私はそれを兄(弟)に返却した。
b. Damals wollte ich Egon verschiedene neue Häuser zeigen. 当時私はエーゴンに様々な新しい家を見せたかった。

第二に同じカテゴリー内では、代名詞の場合、(10)a.のように4格—3格の語順、定の名詞と不定の名詞の場合、b.のように3格—4格という語順が設定されている。

- (10) a. Man hat ihn mir gezeigt. 人はそれを私に見せた。
b. Man hat meinem Bruder den Apparat gezeigt. 人は私の兄(弟)にその機械を見せた

Hoberg (1981: 43ff.)は、Engelの提案した規則をコーパスの事例によって実証しようとして試みている。2項の補足成分が実現する文の語順を調査した上で、Engelの語順規則が実際の言語使用の頻度と一致しない部分を指摘している。その際、Hobergは名詞句の意味内容に注目している。3格と4格の語順について述べた部分では意味内容に関して二点言及がある。一つめは名詞句が表す内容が生物か無生物かという点である。基本語順(Grundfolge)では例文(11)のように、生物を表す項(3格Verleger「出版者」)は無生物を表す項(4格Verdienstkreuz「功労十字勲章」)より先に現れるという。(Hoberg 1981: 46)

- (11) Bundespräsident Heinrich Lübke hat gestern in seinem Berliner Amtssitz Schloß Bellevue dem Verleger Axel Springer das Große Verdienstkreuz mit Stern des Verdienstordens der Bundesrepublik Deutschland überreicht. 連邦大統領ハインリヒ・リュプケは昨日ベルリンの官庁所在地ベルビュー城で出版者アクセル・シュプリングーにドイツ連邦共和国の功労章の付いた大功労十字勲章を授与した。

このように3格が生物、4格が無生物であれば基本語順(Grundfolge)は「3格—4格」であると述べている。但し、この逆の組み合わせ、すなわち3格が無生物、4格が生物の事例には全く言及がない。

なお、3格と4格が共に無生物である場合と、共に生物である場合は、基本語順が「4格—3格」であるという。無生物の例文として(12)が、生物の例文として(13)が挙げられている。

- (12) ...; er hatte den Tod der Vertreibung vom Heimat und Besitz vorgezogen. 彼は故郷と所有地からの追放より、死を選んだ。

- (13) Wenn wir den schwarzen Bankbeamten in Aruscha dem Stallknecht in einem entlegenen bayrischen Dorf gegenüberstellen... もし私たちがアルーシャの黒人の銀行員をバイエルンの辺鄙な村の家畜番と対決させたら

3格と4格が共に無生物となるタイプの動詞には、unterordnen「～に～を従属させ

る」, anpassen「～に～を合わせる」, gleichstellen「～に～を平等に扱う」, vorziehen「～に～を優先する, より好む」など, 3格と4格が共に生物である文の動詞としては, vorstellen「～を～に紹介する」, gegenüberstellen「～を～に対比させる」, vorführen「～を～に見せる」などが該当するという。

3格と4格の意味内容に関して述べられている第2の点は, 4格が機能動詞構文の名詞部分であるかという点である。機能動詞構文では名詞と動詞が意味的に密接な関係にあり, 名詞が述語的な意味の一部をなす。意味的に動詞と近い関係にある項は, 統語的にも動詞の近くに置かれる。ドイツ語の基本語順はSVO, つまり動詞が末尾に来るとする考え方がある。⁷ 動詞と意味的に密接な関係にある語は, 統語的にも動詞と近い位置, すなわち他の項より後ろに置かれることになる。4格が意味的に動詞との密接性を示す場合は, 「3格-4格」語順が基本的だと考えられる。Hobergは例として(14)を挙げ, 4格が機能動詞構文(die Waage halten「釣り合う」)の名詞部分(die Waage「天秤」)であれば, 3格が生物か無生物かに関わらず, 「3格-4格」語順になるとしている。

(14) Es gibt eine Gegenkraft, die bei astronomischen Bahnen der Schwerkraft genau die Waage hält. 天体の軌道には, 重力にちょうど釣り合う反重力がある。

しかし, 機能動詞構文の名詞が3格となる事例は, 自動詞文における実現が示唆されているのみであり, 他動詞文は全く挙げられていない。研究者によっては, der Gefahr aussetzen「危険にさらす」などを3格と動詞による機能動詞構文と見なしている。

(Wegener 1991など)

Hoberg (1981) は, 以上のように, 3格と4格の生物・無生物という特性, および機能動詞構文の名詞部分を表すかという二つの点をふまえ, (15)に挙げたように, 「4格生物-3格生物-4格無生物-3格無生物-3格・4格機能動詞構文の名詞」を基本的語順としている。

(15) A+bel - D+bel - A-bel - D-bel - (A/D) FN⁸

4格生物-3格生物-4格無生物-3格無生物-(4/3格)機能動詞構文名詞

また, 代名詞が前に置かれることを考慮し, 1格, 3格, 4格の全体の基本語順(Gesamtgrundfolge)をまとめると, (16)が想定できるという。

(16) (N-A-D) pron - ((N-A-D) +bel - (N-A-D) -bel) nom - (N/A/D) FN⁹

(1-4-3格)代名詞-((1-4-3格)生物-(1-4-3格)無生物)名詞-(1-4-3格)機能動詞構文の名詞

⁷ この語順は例えば, 不定詞句で動詞が最後に置かれることや, 副文の語順や, 助動詞を含む文中の配置などに現れている。

⁸ 記号は+bel:生物, -bel:無生物, FN:機能名詞。

⁹ 記号はpron:代名詞, nom:名詞を表す。

なお、Engel (1972) の提案した語順規則では、定の名詞と不定の名詞の語順にも指摘があるが、Hoberg (1981) は、定と不定の対立を 3 格と 4 格の語順と結びつけていない。

確認すると、Hoberg (1981) の語順規則では、第一に「代名詞－名詞－機能動詞構文の名詞部分」という対立が見られ、第二に、名詞においては「生物－無生物」という語順が提示されている。第三に、以上の二点で同じ種類の項が現れる場合、「1 格－4 格－3 格」の順に実現するということになる。

2.1.2 Zifonun et al. (1997) の語順決定要因

次に、Zifonun et al. (1997) で述べられている語順規則 (Stellungsregel) について概観する。文中域における 3 格と 4 格の語順に該当する規則を見ると、Hoberg (1972) の挙げた規則と一致する部分が多い。まず第一に、形態的要因、すなわち例文 (17) の 3 格 ihm 「彼」のように典型的な代名詞が他の要素 (4 格 Pistole 「ピストル」) より前に置かれる傾向が指摘されている (Zifonun et al. 1997: 1510ff.; 例文も)。¹⁰

(17) Blitzschnell schlug ihm der Beamte die Pistole aus der Hand. 電光石火の速さで公務員がピストルを彼 (3 格) の手からたたき落とした。

形態的要因の次の段階として、生物の項が無生物の項より前に来るといった意味的な規則を挙げている (Zifonun et al. 1997: 1512ff.)。3 格と 4 格の事例には (18) などが挙げられている。

(18) Wollen Sie den Chefärzten das private Liquidationsrecht nehmen? あなたは主任の医師達からプライベートな解散権を取り上げるつもりですか?

この 2 つの要因が働いていない場合には、項の実現の順序は 1 格－4 格－3 格になるという (Zifonun et al. 1997: 1518ff.)。¹¹ 代名詞の例として (19) a., 名詞の例として b. などが記載されている。

(19) a. Also, ich bring sie Ihnen auf jeden Fall wieder, (...). それでは、私がそれをあなたにいずれにしろ再びお持ちします。

b. Die alte Poetik ordnet das Epigramm der lyrischen Gattung zu. 古い詩学はその風刺詩を叙情詩のジャンルに分類している。

さらに、Zifonun et al. では情報構造についても言及がある。無標の中域語順 (unmarkierte Mittelfolge) では、Hintergrundinformation 「背景の情報」が Vordergrundinformation 「前景の情報」に先行すると述べている (Zifonun et al. 1997: 1558ff.)。但し、3 格と 4 格に注目した事例は挙げていない。

¹⁰ 典型的な代名詞とは、前方照応、人称ダイクシス、語彙的再帰代名詞を指している。

¹¹ 例えば、3 格も 4 格も代名詞である場合は、4 格－3 格の語順となる。

2.2. 3格と4格の無標語順

2.1.で言及したHoberg (1981)やZifonun et al. (1997)は、実際の用例から様々な条件を網羅する基本語順を追求する立場であった。それに対し、以下で触れるLenerz (1977)は無標語順を定義し、その定義に特定の文が当てはまるか否かを検証している。

2.2.1 Lenerzの無標語順の定義

Lenerz (1977)は無標語順を次のように定義している：

Wenn zwei Satzglieder A und B sowohl in der Abfolge AB wie in der Abfolge BA auftreten können, und wenn BA nur unter bestimmten testbaren Bedingungen auftreten kann, denen AB nicht unterliegt, dann ist AB die "unmarkierte Abfolge" und BA die "markierte Abfolge".

2つの文肢AとBが、語順ABでも語順BAでも現れ、かつ、語順BAが検証可能な特定の条件下でのみ現れるのに対して¹²、語順ABがその条件に影響を受けないならば、ABが「無標語順」で、BAが「有標語順」である。(Lenerz 1977: 27)

Lenerz (1977: 39ff.)はこの定義をふまえ、直接目的語(4格)と間接目的語(3格)の語順を左右する条件を挙げている。Thema-Rhema-Bedingung「テーマ・レーマ条件」、Definitheitsbedingung「定・不定条件」、Gesetz der wachsenden Glieder「拡大文肢の法則」とSatzklammerbedingung「文枠構造条件」の4つである。そのうち、主に情報構造に関わるテーマ・レーマ条件と定・不定条件を特に重要だとしている。¹³ 本項でいう授与の文意味タイプについてLenerz (1977)は、この2つの条件を用いて次のように述べている。まず、テーマ・レーマ条件という視点で3格と4格の語順を考えると、例文(20)a.のように3格-4格の語順では、先行する3格がレーマでも非文とならない。

(20) Wem hast du das Geld gegeben? 誰にお金をあげたの?

- a. Ich habe dem Kassierer das Geld gegeben. 会計係にお金をあげた。
- b. Ich habe das Geld dem Kassierer gegeben. お金を会計係にあげた。

しかし、(21)b.のような「4格-3格」の語順では、先行する4格がレーマであると文の容認度が落ちる。¹⁴ すなわち、ここでは、制限が見られない「3格-4格」語順が無標であるという。

(21) Was hast du dem Kassierer gegeben? 会計係に何をあげたの?

- a. Ich habe dem Kassierer das Geld gegeben. 会計係にお金をあげた。

¹² すなわち、語順BAは特定の条件下では現れないということになる。

¹³ 「拡大文肢の法則」と「文枠構造条件」は共に文体的な傾向だという。前者は、2つの要素が並ぶときには、「重い」要素が後ろに来る傾向があることを表している。「重い」要素というのは、形容詞や関係文などによって、複合的に、もしくは長くなった要素を指す。後者の「文枠構造条件」は、枠構造の後ろの枠要素がない文では、「重くない」要素が文末には来ないという傾向のことだという。

¹⁴ 「?*」は容認度が低いことを表すマークだという。

b. ?* Ich habe das Geld dem Kassierer gegeben. お金を会計係にあげた。

また、定・不定条件に関しては、例文(22)のa.~d.のように4格が不定の名詞句であるとき、「4格-3格」の語順が不可能であることを指摘している。

(22) Wem hast du ein Buch geschenkt? 誰に本を1冊あげたの?

a. Ich habe dem Schüler ein Buch geschenkt. その生徒に本を1冊あげた。

b. * Ich habe ein Buch dem Schüler geschenkt. *本を1冊その生徒にあげた。

c. Ich habe einem Schüler ein Buch geschenkt. ある生徒に本を1冊あげた。

d. * Ich habe ein Buch einem Schüler geschenkt. *本を1冊ある生徒にあげた。

それに対し、(23)a.~d.では、どんな定・不定の組み合わせも可能であることを挙げ、無標語順は「3格-4格」だと述べている。

(23) Wem hast du das Buch geschenkt? 誰にその本をあげたの?

a. Ich habe dem Schüler das Buch geschenkt. その生徒に本をあげた。

b. Ich habe das Buch dem Schüler geschenkt. 本をその生徒にあげた。

c. Ich habe einem Schüler das Buch geschenkt. ある生徒に本をあげた。

d. Ich habe das Buch einem Schüler geschenkt. その本をある生徒にあげた。

3. 語順の検証 ~無生物3格の事例に基づいて~

本節では、先行研究を考慮した上で、コーパスから収集した事例の語順を検討する。先にも述べたように、無生物3格の事例では文意味タイプによって文中域における語順の傾向が異なる(時田 2005)。「付加」の事例では、「状態変化」や「授与」の文意味タイプと同様「3格-4格」語順が多い。その一方、「影響」の事例では「4格-3格」語順の頻度が高かった。この結果をふまえ、以下の分析では時田(2005)でコーパスから収集した無生物3格の事例を用い、文意味タイプ別にさらに調査を行う。

本節ではまず、2.1.で挙げた語順規則・語順決定要因とコーパス事例の頻度の関連性を探り、「付加」と「影響」の文意味タイプの相違を浮き彫りにする。次に、2.2.で見たLerner(1977)の無標語順の定義に基づく、「付加」と「影響」の文意味タイプではどの語順が無標に該当するのか調査を行う。

なお、研究者により提示した語順についての名称が、Normalfolge「標準的語順」(Engel), Grundfolge「基本語順」(Hoberg), unmarkierte Mittelfolge「無標の中域語順」(Zifonun et al.)などと異なっているが、2.1.で言及した立場の提案する語順は、以下では「基本語順」「基本的な語順」と呼ぶ。それに対し、2.2.で挙げたLernerの定義による語順を「無標語順」とする。

3.1. 語順規則の実証

2.1.で挙げた語順規則を見ると、Engel(1972), Hoberg(1981), Zifonun et al.(1997)のいずれの場合も階層的に提示されている。大筋をまとめると、まず「代名詞-名詞」、次にEngelでは「定-不定」、Hoberg, Zifonun et al.では「生物-無生物」、最後に「4

格－3格」もしくは「3格－4格」という規則が見受けられる。実際の言語使用においてもこのような語順の傾向が示されるだろうか。以下では無生物3格の事例について、第一に3格と4格に代名詞と名詞の対立がある文、第二に定と不定の対立がある文、第三に4格が生物と無生物の対立がある文の語順を明らかにする。その後、この3つのいずれの条件にも当てはまらない文の語順を調査する。以下では、付加と影響の事例を分けて観察し、文意味タイプによる語順の傾向を明らかにする。なお、分析対象は、文の中域に3格も4格も実現している事例に限る。¹⁵

3.1.1 代名詞と名詞の対立

まず、形態という面から語順決定に大きな役割を果たしている代名詞に注目する。先行研究によると、3格と4格の一方が代名詞である場合はその項が先行するという。つまり、例文(24)のように3格のみが代名詞であれば3格－4格語順、(25)のように4格のみが代名詞の場合は4格－3格語順が、基本的な語順として想定できる。

(24) ich hatte ihm (=Roman) eine große, sehr warme literarische Würdigung gewidmet

私はそれ (=小説) にとても暖かい文学的な大きな評価を捧げていた

(25) sie setzen sich dem Druck nicht aus 彼らは自分たちをその圧力にはさらさない

該当する事例の数は文意味タイプにより差があるが、語順について概ね次のような結果になった。上記例文(24)のように3格代名詞、4格名詞の組み合わせの文は、付加のタイプ(100%, 34例)でも影響のタイプ(88%, 7例)でも「3格代名詞－4格名詞」という語順が数的に優位だった。例文(25)のように3格名詞、4格代名詞の文では、影響の文意味では4格代名詞－3格名詞の語順を示す例が96%(228例)で多かったが、付加の文意味では基本語順に反し、3格名詞－4格代名詞語順の文の割合も低くない(60%, 6例)。但し、付加の事例では、該当する事例の4格代名詞が人称代名詞ではなく、例文(26)のようにもっぱら不定代名詞、否定代名詞である点を考慮する必要がある。

(26) a. dieser Pioniersuch gibt der Gründung des " S. d. S. " doch etwas wie einen kulturgeschichtlichen Akzent このパイオニア的試みは「S. d. S.」の創設に何か文化史的なアクセントをもたらす

b. ein Mann, dessen Genie der Welt nichts mehr schenken wird 持っている才能が世界にもはや何も送り出さなくなる人

事例数は、表3のようになる。

¹⁵ ここでは、3格と4格のいずれかが中域以外にある場合や、代名詞の中でも関係代名詞である場合は除く。なお、中域以外に実現する場合、ほとんどが前域に現れている。また、関係代名詞の場合、関係文を伴うことから語順が制限される場合が多いため、除外した。

表3 代名詞と名詞の対立

	3 格代名詞 4 格名詞		3 格名詞 4 格代名詞	
	付加	影響	付加	影響
	3 格－4 格	34 (100%)	7 (88%)	6 (60%)
4 格－3 格	0 (0%)	1 (12%)	4 (40%)	228 (96%)
計	34	8	10	237

このように、人称代名詞のように典型的な代名詞が名詞に先行するという基本語順は、コーパス事例の傾向にも現れている。

3.1.2 定と不定の対立

次に、3 格と 4 格が表す意味内容に定と不定の対立が見られる事例を調査する。まず、先行研究における扱いを確認しておく。定と不定の要素の語順については、先にも述べたように Engel (1972) で指摘があり、「定の名詞－不定の名詞」という基本語順が主張されている。また、Zifonun et al. (1997) は、情報構造について背景の情報が前景の情報に先行するとしている。背景の情報は旧情報、前景の情報は新情報であることが多く、定と不定を比べると、定の項は旧情報、不定の項は新情報を表す傾向があると考えられる。そこから、Zifonun et al. (1997) による情報構造という視点からも「定－不定」という語順が想定される。なお、定・不定の判断は、冠詞など形態的要素を手がかりに行った。

まず、代名詞も含め、3 格と 4 格に定と不定の対立がある事例の語順をみる。すなわち例文(27)のように 3 格が定、4 格が不定の事例と、例文(28)のように 4 格が定、3 格が不定を表す事例が対象となる。

(27) würde das Blut [...] meinem Blech eine Farbe geben, die es bisher nur als

Lackanstrich gekannt hatte? 血が僕のブリキ (の太鼓) に、これまで単にラッカーの塗装としてしか知らなかった (赤い) 色を加えるのだろうか?

(28) um sich einer Bestrafung in der Bundesrepublik zu entziehen 自分を連邦共和国での処罰から逃れさせるために

調査の結果、3 格が定、4 格が不定の組み合わせの事例では、付加のタイプの 99% (198例) が「3 格－4 格」語順であり、圧倒的に多いことが分かる。また影響のタイプでも事例数の差は大きくないが、語順が 3 格－4 格となる事例が 59% (19例) と優勢である。一方、3 格が不定、4 格が定を表す事例では影響の文意味の場合、4 格一同様に 3 格語順が 99%、71例と大半を占めた。付加のタイプでは該当事例が少ないが、同様に 3 格－4 格の事例が多かった (75%、3例)。全体の事例数は表 4 に挙げる。

表 4 定と不定の対立

	3 格定 4 格不定		3 格不定 4 格定	
	付加	影響	付加	影響
	3 格－4 格	198 (99%)	19 (59%)	3 (75%)
4 格－3 格	3 (2%)	13 (41%)	1 (25%)	71 (99%)
計	201	32	4	72

さらに、Engel (1972)が提案した語順の公式に従い、代名詞を除き、定の名詞と不定の名詞のみに注目する。例文(29)のように3格名詞が定、4格名詞が不定を表す事例と、逆に例文(30)のように3格名詞が不定、4格名詞が定を表す事例を対象とする。

(29) das Experiment stellt der Natur Fragen 実験が自然に質問をする

(30) man müßte diesen ganzen Bereich einer unkontrollierbaren Beliebigkeit überlassen その分野の全てを、コントロールできない任意性に委ねなくてはならない

3格名詞と4格名詞の事例のうち、定と不定の対立が見られる事例に限定すると、語順の傾向は次のようになる。事例数は異なるが、先の代名詞を含んだ事例の結果とほぼ同様の傾向を示した。3格が定の名詞、4格が不定の名詞という組み合わせでは、いずれの文意味でも3格－4格語順の事例数が多い。但し、付加の文では98% (175例)が該当するのに対し、影響では6割ほど(14例)の事例しか見られなかった。3格が不定の名詞、4格が定の名詞の場合、付加のタイプの事例は少ないが、3例中2例が「4格－3格」語順で、影響のタイプでは18例全ての事例で語順が「4格－3格」である。事例数は表5に挙げる。

表 5 定名詞と不定名詞の対立 (代名詞を除く)

	3 格定名詞 4 格不定名詞		3 格不定名詞 4 格定名詞	
	付加	影響	付加	影響
	3 格－4 格	175 (98%)	14 (61%)	2 (67%)
4 格－3 格	3 (2%)	9 (39%)	1 (33%)	18 (100%)
計	178	23	3	18

3.1.3 生物と無生物の対立 (4格が生物を表す事例)

次に、意味的要因、すなわち生物・無生物の区別に注目し、語順を観察する。先行研究によると、3格と4格の一方が生物で、もう一方が無生物の場合、生物の項が先行するという。本稿の分析対象は無生物3格の事例なので、例文(31)のように3格が無生物 (Schicksal「運命」) で、4格が生物 (Ärmsten「最貧民」) である事例の語順

を観察する。先行研究に従うと、このような組み合わせでは、「4格-3格」の組み合わせが基本的だという。

(31) er [...] überließ den Ärmsten seinem harten Schicksal 彼は最貧民を彼の厳しい運命に委ねた

まず、名詞と代名詞の対立、定と不定の対立を考慮せず、4格が生物となる事例を観察した。付加のタイプでは、該当事例が3例と数少ない。これは「3格の無生物に4格の生物を付加する」という状況が考えにくいためであろう。3例中2例が「3格-4格」の語順であるが、この条件下では、付加の事例にみられる語順と「生物・無生物」という要因に関連があるか否かは判断することは難しい。影響の文意味を表す事例は多く、そのうち4格-3格語順が9割以上(178例)を占めている。影響の事例については、生物の項が先行すると言える。事例数は表6のようになった。

表6 生物(4格)と無生物(3格)の対立

	付加	影響
3格-4格	2 (67%)	9 (5%)
4格-3格	1 (33%)	178 (95%)
計	3	187

次に、4格が生物を表す事例のうち、代名詞と名詞の対立と、定と不定の対立を含まないものに限定して語順を観察する。付加のタイプでは「3格無生物-4格生物」が2例見られるのみで、有意義な結果を得られなかった。影響のタイプでは、例文(32)のように「4格生物-3格無生物」の事例の方が多く(11例中10例)見られた。

(32) er unterwarf die Mönche dem Wort und dem Willen des Abtes 彼は修道僧たちを修道院長の言葉と意志に従わせた

事例数はわずかながらも、影響の事例においては生物と無生物の対立が語順と関連していると考えられる。表7に該当事例数を挙げる。

表7 生物(4格)と無生物(3格)の対立(代名詞と定を除く)

	付加	影響
3格-4格	2 (100%)	1 (9%)
4格-3格	0 (0%)	10 (91%)
計	2	11

なお、表7で影響の該当事例が少ないことは、表6の「4格-3格」の大部分(165例)で、3格が名詞、4格が代名詞を表すことに由来する。表6を見る限り、生物と無生物の対立は影響の文意味を表す多くの事例で観察されるが、代名詞と名詞の対立と明確に区別はできない。

3.1.4 代名詞と名詞、定と不定、生物と無生物の対立を含まない事例

以上では、先行研究で言及されている語順規則が無生物3格のコーパス事例と一致するか否かを分析した。その結果、①代名詞が名詞に先行する傾向と、②定の項が不定の項に先行する傾向は語順規則と一致するようだ。また、③生物が無生物に先行する傾向は影響の事例で観察されたが、事例の限り①の傾向と不可分であった。先行研究において①がより重要な要因としてあげられていることを考慮すると、③が単独で大きな役割を果たしているかは明らかでない。

この節では、これらの対立が見られない事例の語順を観察する。すなわち、第一に3格と4格が共に代名詞もしくは名詞であり、第二に3格と4格が共に定、もしくは不定であり、第三に3格と4格が共に無生物を表すという3つの条件を満たす事例を対象とする。

先行研究によると、このような条件に合致した事例の語順は、名詞の格が問題になるという。3格も4格も代名詞の事例については、上述の通り、いずれの先行研究でも「4格－3格」語順が基本語順とされている。3格と4格が名詞の場合、研究者により見解が異なっている。定の名詞もしくは、不定の名詞の場合、Engel (1972)は「3格－4格」の順になると述べている。無生物同士では、Hoberg (1981)もZifonun et al.(1997)も「4格－3格」を基本の語順としている。実際の事例においてはどのような傾向が見られるだろうか。

まず、3格と4格共に代名詞で、かつ不定を表す組み合わせには該当事例がなかった。3格と4格が定の名詞の事例は影響の文意味で12例収集され、いずれも「4格－3格」の語順を示していた。

3格と4格が共に不定の名詞で無生物を表す事例では、付加の文意味は19例全てにおいて「3格－4格」語順が実現している。影響の文意味は該当事例が少ないが、わずかに「4格－3格」の事例が優勢である(3例, 75%)。3格と4格が定の名詞で無生物を表す事例でも、同様の傾向が見られる。付加の場合、3格－4格の事例が84%, 77例を占め、影響の場合、80%, 48例が「4格－3格」の語順であった。事例数は表8にまとめる。

表8 代名詞と定と生物に関する対立を含まない事例

	代名詞 (無生物)		名詞 (無生物)			
	定		不定		定	
	付加	影響	付加	影響	付加	影響
3格－4格	0	0 (0%)	19 (100%)	1 (25%)	77 (84%)	12 (20%)
4格－3格	0	12 (100%)	0 (0%)	3 (75%)	15 (16%)	48 (80%)
計	0	12	19	4	92	60

代名詞の事例は先行研究に述べられたとおりの語順を示している。これは特に形態

的な制限が強いことを示唆している。名詞の事例については、先行研究で述べられたように3格か4格かという格の対立でなく、無生物3格の事例では文意味タイプが語順の傾向を左右する決め手となっているようだ。3格と4格が共に定の名詞である事例において、付加と影響で語順の傾向が異なることは、カイ2乗検定によって統計的にも有意であることが確かめられる。(図1にグラフも示す。)

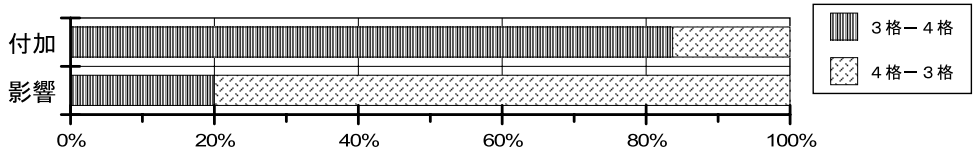


図1 3格と4格(無生物)が定の名詞の事例

第3節では、代名詞と名詞の対立に見られる形態的特徴、定・不定という情報構造上の特徴、生物か無生物かという意味的特徴に配慮し、無生物3格のコーパス事例を分析した。その結果、次のことが明らかになった。第一に、代名詞と名詞の対立、定と不定の対立に関して、先行研究の主張する基本語順と事例に見られる傾向が一致する。生物と無生物の対立では、それほど顕著な結果は現れなかった。¹⁶ 第二に、このような対立を含まない事例の語順の傾向を観察すると、付加の文意味で「3格-4格」、影響の文意味で「4格-3格」の語順の傾向が優位であり、無生物3格の事例では、文意味タイプが語順を決める一つの鍵であることが明らかになった。¹⁷

3.2. Lenerzの定義と事例

次に、Lenerz (1977) による無標語順の定義を、コーパスから収集した事例に適用してみる。テーマ・レーマ条件については、文脈を考慮せずに判断することはできな

¹⁶ 先行研究においては、Hobergなどで語順と機能動詞構文の名詞部分との関連も指摘されている。機能動詞構文については、特に3格を名詞部分とする事例に関して十分な記述がなされていない。そのため、各事例が機能動詞構文に属するかという判断を下し、統計的に処理するのは困難である。語順の傾向を抽出する分析では機能動詞構文を考慮していないが、4節で名詞部分との関連で、コーパスデータをもとに考察を述べる。

¹⁷ Lenerzの挙げた無標語順の定義の関わる条件を参考にすると、項の長さも語順と関係し、短い要素が先行するという文体的な傾向があるようだ。図1に該当する事例のうち、少数派に含まれるものを調査した。付加の4格-3格語順15例では、5例において3格名詞句が4格名詞句に単語数で勝っていた。例えば、*dieses letzte Geheimnis dem kleinen weißen Häufchen hinzuzufügen*「この最後の秘密を小さな白い堆積に加えること」では4格が3語、3格が4語である。また、影響の3格-4格語順13例において、4格が3格より語数が多い事例は6例あった。例えば *erst Martin Heidegger [...] widmet dieser einen Idee seine ganze philosophische Existenz*「初めてマルティン・ハイデガーがこの一つの考えに彼の全ての哲学的存在を捧げる」では3格が3語、4格が4語である。

いが、定・不定条件は3格と4格に見られる定・不定の組み合わせと語順によって、調査することができる。すなわち、4格不定－3格定の事例が見られなければ、「3格－4格」が無標語順だと想定でき、逆に、3格不定－4格定の事例が見られなければ、「4格－3格」が無標語順と考えられる。

そこで、このそれぞれの条件を満たす事例の有無を調査した。該当する事例はいずれも少なく、参考程度の結果しか現れなかったが、わずかながらもある種の傾向が見られた。影響のタイプの場合、両方の組み合わせに該当する事例が確認されたが、「4格不定－3格定」の文が12例収集されたのに対し、「3格不定－4格定」の組み合わせは1例のみであった。どちらかといえば「4格－3格」が無標語順である可能性が高いと考えられる。付加の文意味では、両方の組み合わせが3例ずつ現れて、この結果から無標語順は判明しない。しかし少なくとも、どちらが無標語順である可能性も残されている。参考までに、時田(2005)で収集した生物3格の事例も見てみると、状態変化のタイプでは、「3格不定－4格定」の事例も1例しか見られないが、状態変化、授与の文意味共に、「4格不定－3格定」の事例が現れない。Lenerzに従えば、この2つのタイプでは「3格－4格」が無標語順だと考えられる。該当する事例数は次の表9に示す。

表9 不定が先行する語順の事例数

	無生物3格の事例		生物3格の事例	
	付加	影響	状態変化	授与
4格不定－3格定	3	12	0	0
3格不定－4格定	3	1	1	6

3.3. まとめ

第3節では、付加の文意味タイプと「3格－4格」、影響の文意味タイプと「4格－3格」の関連を想定し、先行研究を参考に2つの観点から検証を行った。その結果、第一に、いくつかの語順決定の要因に依存せずとも、付加の文意味と「3格－4格」語順、影響の文意味と「4格－3格」語順に深い関連があることが明らかになった。また、代名詞と名詞の対立、定と不定の対立がある事例では、先行研究で基本的とされた語順の頻度が高いことを示した。第二に、無標語順の判断基準となる「定・不定」の組み合わせに基づくと、付加の文意味では明確な結果が現れなかったが、影響の文意味では、事例数の相違から「4格－3格」語順が無標である可能性が高いことが分かった。

4. 名詞句の意味内容と語順

本節では、無生物3格の事例は文意味によって深い関連を持つ語順が異なり、付加と「3格－4格」、影響と「4格－3格」という2つの組み合わせが成り立つ背景を

探る。ここには形態的、意味的要因の他にもいくつかの要素が絡み合っていると思われるが、本節では名詞と動詞の關係に注目する。Hoberg (1981)やZifonun et al. (1997)が指摘しているような機能動詞構文ほどの密接な關係がないとしても、3格と4格のいずれが動詞と意味的に近接關係にあるかという点は、語順と深く関わると考えられる。以下では、この点についてコーパス事例に基づいて考察する。

時田(2005)でも触れたように、Wegener (1991)やZifonun et al.(1997)によれば、無標語順が「4格－3格」となる文は、機能動詞構文か比較動詞の文だという。そのうち、機能動詞構文については、基本的に抽象物を表す3格は動詞と意味的なまとまりをなし、例えば(33)に示すように、基本的に対応する単純な動詞があると記述されている。

(33) jemanden einer Gefahr aussetzen – jemanden gefährden 誰かを危険にさらす－誰かを危うくする

ドイツ語の基本語順はSVOであり、動詞が末尾に来るとする考え方に基づくと、動詞と意味的に密接な關係にある3格は、統語的にも動詞に近い位置に置かれ、「4格－3格」語順が基本的だと考えられる。

先行研究に機能動詞として挙げられているaussetzen, unterziehen, unterwerfen, übergeben, ausliefern¹⁸ は本研究では文意味に基づき「影響」のタイプの動詞と考えている。コーパスから収集した具体的な事例を見ると、これらの動詞の文では確かに3格が抽象物を表す場合が多い。また、全ての事例ではないが、(34)のように動詞と名詞の組み合わせ(einer Prüfung unterwerfen)と動詞(prüfen)が対応すると考えられる事例もある。

(34) a. daß die Philosophie die Ergebnisse der Naturwissenschaft einer Prüfung durch die ihr allein zur Verfügung stehenden Methoden unterwirft. 哲学が自然科学の成果を、哲学にのみ有効な方法で検査するということ(←自然科学の成果(4格)に検査(3格)を受けさせる)
b. etwas einer Prüfung unterwerfen - etwas prüfen 何か(4格)に検査(3格)を受けさせる－何かを検査する

この場合、4格より3格の方が動詞との意味的な關係が深い。そのため、4格－3格語順が基本的だと推測できる。

これはいわゆる機能動詞だけでなく、影響の文意味タイプを示す他の動詞にも当てはまるのではないだろうか。そこで、抽象名詞は具体名詞に比べ、動詞と共に意味的なまとまりをなしやすいのではないかという可能性を元に、付加と影響の事例における3格の表す内容を調査した。対象は第3節と同様に時田(2005)で収集した事例とする。¹⁹ 3格無生物を抽象物、具体物、機関、書類等に分類し、²⁰ それぞれの事例数

¹⁸ aussetzen「～を～にさらす」、unterziehen「(4格)に(3格)を受けさせる」、unterwerfen「(4格)に(3格)を受けさせる」、übergeben「～を～にゆだねる」、ausliefern「～を～にゆだねる」

¹⁹ 3格と4格のいずれかが文中域に現れていない事例も対象とした。

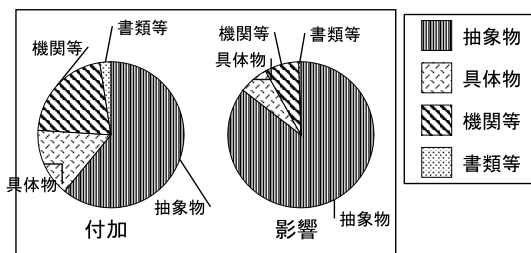
を示すと、興味深い結果が現れた。

3格が抽象物を表す割合は、付加の事例（61%）より影響の事例（86%）の方が高い。その点を考慮すると、付加タイプの3格より、影響タイプの3格の方が、動詞と意味的なまとまりを構成しやすく、従って動詞から近い後ろの位置に置かれると考えられる。表10と図2に結果を示す。²¹

表10 無生物3格の指示対象

	付加	影響
抽象物	251 (61%)	382 (85%)
具体物	62 (15%)	29 (6%)
機関等	89 (22%)	34 (8%)
書類等	10 (2%)	2 (0.5%)
計	412	447

図2 無生物3格の指示対象

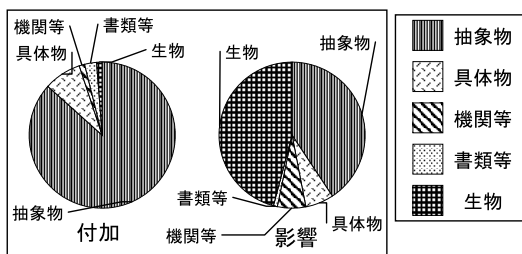


さらに4格の表す内容も探ったところ、抽象物に関して3格とは異なる傾向を示した。影響の事例より付加の事例の方が、抽象物の占める割合が高くなっている。ここから、付加の4格が影響の4格より、動詞と意味的に密接な関係にあると推定でき、2つの意味タイプに見られる語順の振る舞いに違いがあることと一致する。事例数は表11と図3に示す。

表11 4格の指示対象（事例数）

	付加	影響
抽象物	357 (87%)	182 (41%)
具体物	34 (8%)	28 (6%)
機関等	5 (1%)	28 (6%)
書類等	11 (3%)	4 (1%)
生物	5 (1%)	205 (46%)
計	357 (87%)	182 (41%)

図3 4格の指示対象



以上のデータから明白であるように、抽象名詞を表す頻度は、付加のタイプでは3格より4格、影響のタイプでは4格より3格が高くなっている。すなわち、付加では4格、影響では3格が動詞と密接な関係にある可能性が考えられる。この点は、付加の文意味と「3格-4格」語順、影響の文意味と「4格-3格」語順との関係を示唆している。

²⁰ 書類等は、書かれた内容を意味する場合は抽象物と捉えられ、書かれた物体を指すときには具体物と捉えられるため、抽象物、具体物とは別に項目を設定した。

²¹ ここで分析対象とした事例は、3格と4格が共に中域に現れる事例以外も対象としている。そのため、事例総数は3章の分析対象より多い。

5. おわりに

以上、先行研究で挙げられた基本語順や無標語順を参考に、無生物3格の他動詞文における中域語順を分析した。コーパスデータに見られる語順の傾向を詳細に調査したところ、代名詞と名詞の対立、定名詞と不定名詞の対立に基づく基本語順は、実際の言語使用の傾向と一致することが分かった。さらに、名詞の形態的、意味的、情報構造上の語順決定要因を除いても、付加の文意味では「3格－4格」語順が、影響の文意味では「4格－3格」語順が数的に優勢であることが明らかになった。また、傾向の強い語順（基本語順）と文意味タイプとの関連を、機能動詞構文の考え方を元に、名詞句の意味内容という視点から考察した。

本稿では、無生物3格の事例においては、語順の傾向は文意味タイプによって異なることが明らかになったが、今後は、語順と文意味タイプの関連を探ると共に、付加、影響の文意味タイプと、無生物3格の他の文意味タイプ、生物3格の事例、前置詞格を伴う他動詞文などとの対比も行っていきたい。

言語資料

Langenscheidts e-Großwörterbuch Deutsch als Fremdsprache. 規模：66.000語収録。

Mannheimer Korpus I, II：制作：IDS, 規模：345 テキスト, 約250万語, 年代：1949～1974年, 内容：文学, 回顧録, 研究書・通俗科学の文献, 大衆文学, 新聞・週刊誌の記事など。

参考文献

Engel, Ulrich (1972): Regeln zur "Satzgliedfolge". Zur Stellung der Elemente im einfachen Verbalsatz. In: Linguistische Studien I. Düsseldorf: Schwann. S. 17-75.

Hoberg, Ursula (1981): Die Wortstellung der geschriebenen deutschen Gegenwartssprache. Untersuchungen zur Elementenfolge im einfachen Verbalsatz. Ismaning: Hueber (Heutiges Deutsch 10).

Johansen, Ingeborg (1988): Der heterogene deutsche Dativ 1988. Zur Syntax, Semantik und Sprachgebrauchsbedeutung. Heidelberg: Winter (Germanische Bibliothek).

Lernerz, Jürgen (1977): Zur Abfolge nominaler Satzglieder im Deutschen. Tübingen: Narr (Studien zur deutschen Grammatik 5).

Wegener, Heide (1991): Der Dativ - ein struktureller Kasus?. In: Fanselow, Gisbert/ Felix, Sascha W. (Hgg.): Strukturen und Merkmale syntaktischer Kategorien. Tübingen: Narr. S. 70-103.

Zifonun, Gisela/ Hoffmann, Ludger/ Strecker, Bruno (Hg.) (1997): Grammatik der deutschen Sprache. 3 Bände. Berlin: de Gruyter (Schriften des Instituts für Deutsche Sprache 7, 1-3).

齋藤俊雄／中村純作／赤野一郎編（1998）：『英語コーパス言語学－基礎と実践－』
研究社出版.

時田伊津子(2005)：「他動詞文の無生物3格と中域語順(1)」In：敦賀陽一郎/高垣敏
博/浦田和幸編『コーパス言語学における語彙と文法』（言語情報学研究報告7）
S:383-398.

Inanimate datives and word order in middle field (2)

Itsuko TOKITA

(TUFS part time lecturer)

The purpose of the present article is to investigate the relation of the semantics to word order in transitive sentences with an inanimate dative.

A lot of studies have been made on word order and have shown that the “unmarked” (or “basic”) order in middle field is “dative – accusative”, as (1) shows;

- (1) Er schenkte der Mutter Blumen.
he gave the mother (dat.) flowers (acc.)

It describes only the sentences where the dative referent is a person or an animal. There have only been a few studies on inanimate datives and they mentioned the constructions, described on (2);

- (2) Er setzte das Kind der Gefahr aus.
he set the child (acc.) the danger (dat.) out (particle)

Previous research has shown that the word order “accusative – dative” is “unmarked” in such a sentence. Based upon the analysis of the empirical study with “Mannheimer Korpus I, II” in Tokita (2005), the sentences with an animate dative tend not to realize the order “accusative – dative” (23 sentences), but “dative – accusative” (221 sentences). On the other hand, the tendency of the word order with an inanimate dative differs with the semantics of the sentence; the results showed that nearly 90% of sentences (330/375 sentences) have the objects in the order “accusative – dative” in the semantic type “Influence”, like (3), while in the semantic type “Addition”, as shown on (4), the percentage of the sentences with the word order “dative – accusative” was more than 90% (316/340 sentences).

- (3) Er setzte das Kind der Gefahr aus. (=2)
he set the child (acc.) the danger (dat.) out (particle)
- (4) Er hat dem Strauß eine Karte beigelegt.
he has the bouquet (dat.) a card (acc.) attached

It could be hypothesized from this fact that the “unmarked” word order accords with this tendency in the practical use of language. It is presumed that the word order “dative – accusative”

can be “unmarked” in the semantic type “Addition”. Therefore, we will investigate the relation between the semantics and the word order in transitive sentences with an inanimate dative; concretely, the relation between the semantic type “Influence” and the word order “accusative – dative”, between “Addition” and “dative – accusative”

The word orders, shown in Tokita (2005), can be affected by morphological, syntactic, semantic and informational factors. First, we outline word order rules and “basic” or “unmarked” order for various elements which have been stated in previous research.

Secondly, we will test with sentences from “Mannheimer Korpus I, II” whether these are plausible rules. The findings of this analysis include: first, the morphological (pronoun – noun), semantic (animate – inanimate) and informational (definite – indefinite) factors affect the tendency of the word order in practical use. Secondly, exclusive to sentences with the above elements, the word order does not depend on the syntactic factor, but tends to differ with the semantics; in the type “Influence”, the order “accusative – dative” occurs often (52/65 sentences; except sentences with double pronoun), the order in type “Addition” is usually “dative – accusative” (96/111 sentences). Thirdly, following the definition of “unmarked” order by Lenerz (1972), the order “accusative – dative” should be “unmarked” in the type “Influence”, however the “unmarked” order for “Addition” is not clarified.

Lastly, I will try to disclose the relation of the word order to the sentence semantics concerned with the referent of the dative and the accusative nouns.

We can conclude from this fact that the sentence semantics also play an important role in the decision of the word order in sentences with an inanimate dative.